

はじめに

本書は、2006年度開講の秋田大学教育文化学部日本・アジア文化選修専門教育科目「日本文化論Ⅵ」における沖縄フィールドワークの成果報告レポート（Ⅰ～Ⅲ部）と沖縄フィールド・リサーチのための資料（Ⅳ部）である。秋田大学教育文化学部の文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」（特色GP）採択課題「ゲーミング・シミュレーション型授業の構築」（平成18-20年度、責任教員：井門正美）による授業実践のための教材として刊行するものである。

ここで報告するレポートは、いずれも、沖縄の現在を「外部の目」で観察したものである。「外部の目」による観察は、ときに「内部の目」（地元民の視点）では見過ごされてしまう事象を顕在化させる。もちろん、「外部の目」の生かし方を知らない未熟な調査者が、調査のフィールドに順応できず、無理解を曝す危険性は十分に自戒しなければならない。ただし、調査のフィールドに十分に順応したうえで、「外部の目」で対象を観察することができたとき、調査者はさらに、自らの「内部の目」の存在を自覚し、自己を他者として相対化する視点を得ることが可能になる。ここに、秋田大学の学生が沖縄でフィールドワークを行うことの意義がある。

こうした趣旨により、授業では、以下のように、月1回の事前学習会、5泊6日のフィールドワーク、合宿形式の研究成果発表会を実施してきた。

第1回学習会	4月21日	ガイダンス、沖縄の言語と民俗に関する導入
第2回学習会	5月26日	沖縄の人と言語（講義と作業）
第3回学習会	6月23日	沖縄の街と民俗（講義と作業）
第4回学習会	7月21日	フィールドワークの調査テーマ発表
第5回学習会	9月13日	フィールドワーク前ミーティング
フィールドワーク	9月18日～23日	那覇市内巡検、調査
第6回学習会	10月2日	フィールドワーク後ミーティング
第7回学習会	12月23日	研究成果発表会（合宿）

受講者は以下の通りである。

4年次： 荒井正実 仙道久忠

3年次： 小平まゆき 猿田美穂子 沢井美弥 須田恵 田中元 横山由希

2年次： 秋山和博 麻生有妃 加藤麻美 工藤将輝 斎藤泉実 渋谷咲希
戸嶋祥子 東本萌 細越まみ 武藤綾香

オブザーバー参加： 成田哲也（秋田大学大学院）

高橋さつき（お茶の水女子大学大学院）

受講者（学部学生）は、事前学習会での導入を経たのち、各自で情報収集をし、フィールドワークのための調査テーマを各自で設定した。フィールドワークでは、18・19日に那覇市内を巡検し、20～22日に各自の調査を実施した。この間の現地調査で得たデータを整理し、研究成果発表会での検討を経てまとめたのが、本書Ⅰ～Ⅲ部である。さらに、今回の授業実践をフィールド・リサーチ法の習得のための教材として生かすために、各種資料を収録したのが本書Ⅳ部である。

なお、Ⅲ部に収録した戸嶋と工藤のレポートは、2006年度後期開講の「日本文化論 講読演習Ⅷ（社会言語学の応用）」（担当：日高）で両名が取り組んだ課題の成果報告である。ともに沖縄でのフィールドワークを体験したうえで、本土でメディアを通じて受容する「沖縄」（沖縄映画・沖縄音楽）について、「ことば」に着目して分析した。併せて本書に収録する。

この授業を担当する島村は民俗学（朝鮮研究）を専攻し、すでに沖縄での調査研究の実績をもつ。日高は方言学を専攻し、これまで日本本土の各地で調査を実施してきたが、沖縄での調査は今回が初めてである。民俗関係調査テーマの個別指導は主に島村が行い、言語関係調査テーマの個別指導は主に日高が行ったが、学習会、フィールドワーク、レポート作成では、両名が共同で指導にあたった。ともに、フィールドワークの醍醐味と危うさを知る者として、今回の調査と授業実践の意義を世に問いたい。

現地調査でご協力いただいた方々は、100名を超える。個別には、それぞれの論文で謝意を述べることとするが、ここでも記して感謝の意を表したい。

2007年2月

島村恭則

日高水穂